

A氏からチームが学んだこと

新いずみ病院 看護部 精神科閉鎖病棟

堀雄臣 山林明子 大山明寛

< はじめに >

近年、発達障害は、精神科において注目されている疾患の一つである。その診断の難しさから他の疾患との区別も困難なことが多いと言われている。

本事例のA氏は、適切な診断治療によって良好な経過を辿った。この事例を通して、発達障害における治療環境と看護のあり方を検討した。

< 研究方法とその結果 >

研究期間

平成23年4月～10月

研究方法

患者の経過にそって関わりが密であった看護師のプロセスレコードを使用し、看護介入を分析した。

研究結果

患者の病状変化に伴って、時に看護師も陰性感情をいただき、看護に影響していたことがわかった。

看護師が患者に共感できたとき、患者との心理的距離感は縮まる。患者参画型カンファレンスの実施や日常の患者同士の関係性も結果的に患者の病状に良い影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

退院後も症状が再燃しないように、家族を含めた看護介入をどう具体化していくのか。発達障害における継続的な環境調整のあり方が近々の課題でもある。